

の友に萬子・素堂ありと載せたり。といへり。又或俳書に、
一とせ芭蕉翁北國に下りし時、生駒氏萬子に句の事を尋ね
られし。萬子答に、あまたあれどもせめて此句こそとて、
藻がぐれに浮世をのぞく蛙哉

といふ句を出せり。芭蕉面白し。今少しと難じけり。萬子、
翁の道すがらの句を尋ねしに、
道の邊のむくげは馬に喰はれけり

俳諧はかやうに有度きものと申されければ、萬子偕は最
初の句もかやうにてはと、

あちらむきこちらむきけり蛙哉

と云ひければ、翁稱美ありしと也。といへり。

又風俗文選に萬子の愛梅説を載す。左の如し。

屈原楚辭にわすれ、菅家宰府に招く。西の對のおぼろ夜に
我が身ひとつをかこち、孤山のたそがれに疎影横斜をうつ
す。山路の朝日のどやかにさし出でたる折かけ垣の匂ひ、
殊に春めき、谷の扉うらゝかに打霞み、竹の嵐枯葉がちな
るに初音ほころび、下月江南の天氣、醉客馬にねて酒家の
村を出で、師走の冬籠たる越路の雪の中に、朝數寄の袂に

匂ひをとどむ。遍照が折箸・皇后の額・數珠・十露盤の粒・香
木・染屋の汁、これ皆かれが風姿風情のわづかの端なるべ
し。彼の説にいへるは、牡丹は花の富貴なる物なり。菊は
花の隱逸なるものなりと。是のかたちにより其愛する人
により。蓮は花の君子なるものなりと。是は其理屈によ
れり。我はその理屈をとらず。梅は花の風雅を好むものな
り。我は其風雅を好むものを愛するものなり。

右俳文の句語をもて、萬子が博識なる事知るべし。此の外
萬子が詠出せる發句どもは彼是あれど、今爰に略す。

○前田三左衛門蓋下邸

延寶金澤圖に如左記載せり。

十二冊定書普請會所部

前田三左衛門殿下屋敷泉水・築山有之所、并二拾四・五間四
方之屋敷、右二ヶ所被下之候條被相渡、其外は上り候間、
請取可被申候。恐惶謹言。

亥十二月十一日

前田 對馬
津田 玄蕃
奥村 因幡



岡田十右衛門殿
津田次郎左衛門殿
村 善右衛門殿

按ずるに、右は萬治二年己亥なるべし。泉水・築山有之下
屋敷といふは、則ち三社どんど橋の傍なる地にて、此の下
邸は此の時賜はりたるなるべし。さて今一ヶ所の下邸は、
何れの地ならんか。宮腰口の今醒ヶ井町と稱する下邸は、
延寶の後三社下邸等の地用地と成り、兩所を合併して賜は
りたるもの也といへり。今前田氏の傳説に、最前の下邸は、
長下邸の隣地なる中川下邸の地なりしを、後宮腰口へ移轉
すといふ。此は三社より移轉せしを過聞したるなるべし。

○生駒内膳邸跡

延寶金澤圖に、生駒内膳上屋鋪・下屋鋪共に、前口四十五間
五尺八寸、南側九十二間四尺五寸、北側七十五間五尺と記
載す。元祿六年の土帳に、生駒内膳三社(うぶがね)三つ雁近所とあり
て、世々こゝに居住せしかど、廢藩以後退去せり。今下邸
共に畠地とす。

○生駒内膳直勝傳